論文

玉鬘と光源氏

上野辰義

〔抄録〕

光源氏にとって、玉鬘巻から真木柱巻までのいわゆる玉鬘十帖において展開する玉鬘との物語とは、なにであったのか。六条院における太政大臣としての光源氏の権勢・みやびの視点、竹取物語取りの視点、第二部若菜巻以降の物語の先蹤としての視点、等々、既に多くの考察がなされているが、本稿では、従来さほど留意されていないいくつかの点に注意しながら、光源氏の人生の一齣という位置づけに配慮しつつ、このことを考えていく手掛かりを得ていきたい。

キーワード　源氏物語、光源氏、玉蔓、すき、夕顔

一　玉鬘巻頭と末摘花巻頭

玉鬘巻は、夕顔喪失から十八年を経てもいまだ変わることのない、光源氏の夕顔への変わらぬ思いから語られ始める。

年月隔たりぬれど、飽かざりし夕顔を、つゆ忘れ給はず、心々なる人のありさまどもを、見給ひかさぬるにつけても、あらましかば、とあはれに口惜しくのみおぼし出づ。右近は…。かの西の京にとまりし若君をだに、ゆくへも知らず、　（玉鬘七一九）[1]

夕顔喪失以後、十八年経過しても夕顔を微塵も忘れることなく、個々の性格の異なる女性たちとかかわりを重ねる中で、一段と夕顔が健在であったのならと、残念にばかり思い出すという。その理由は、この玉鬘巻頭とよく似た語りで始まる末摘花巻頭に明らかである。

思へどもなほ飽かざりし夕顔の露におくれしここちを、年月経れどおぼし忘れず、ここもかしこもうちとけぬ限りの、けしきばみ心深きかたの御いどましさに、けぢかくうちとけたりし、あはれに似るものなう、恋しくおもほえ給。　（末摘花二〇一）

前年八月十六日に喪って以後、五、六箇月ほど経って年を越えても忘れることなく、上の品を軸とした、情交に緊張を強いられる他の妻や恋人たちと違って、夕顔は馴染みやすく、心を開いて打ち解けることのできる存在だったからである。最愛の紫上を得てもその事情は変わらない。紫上は「少しわづらはしき気そひて、かどかどしさのすすみ給へる」（朝顔）女性で嫉妬を隠さなかったが、夕顔は「世の人に似ずものづつみをし給ひて、人にもの思ふけしきを見えむを恥づかしきものにし給ひて、つれなくのみもてなして御覧ぜられたてまつり給ふ」ようにふるまう女性で、「女はただやはらかに、とりはづして人にあざむかれぬべきが、さすがにものづつみし、見む人の心には従はむなむあはれに」（夕顔）思われた女性だったからである。

こうして玉鬘巻頭と末摘花巻頭は、他の女性たちと代替不能な特質をもつ夕顔を、喪失後多くの時間が経過しても忘れられず、恋い慕っているという光源氏の心情が語られている点で共通しているが、相違点もある。

末摘花巻では、こうした心理から、光源氏はそうした夕顔の欠損を埋めるべく、常陸宮娘末摘花の状態に疑念を引きずりながらも期待を先行させて接近し、失敗に至っていた。それに対し、玉鬘巻では、夕顔の形見と見なされて光源氏の須磨退居以来紫上付きの侍女となっている右近に言及し、六条院移徙時の右近の感慨により、話題が夕顔を経てその遺児玉鬘の、母夕顔の失踪・頓死時に遡って以降の動向に転じていく。それにより、玉鬘は光源氏の養女（対世間的には実子）として六条院入りしてくるのだが、すると玉鬘巻頭には、両親（光源氏・夕顔）の紹介を経て主人公（玉鬘）が登場してくるという、長編的構想の物語の始発の形式が、一編全体の冒頭ではないが認められることになる。光源氏が養父であるという点も、竹取物語の翁とかぐや姫との関係に対応する。玉鬘は既に帚木巻・夕顔巻でその存在が言及されており、夕顔頓死後光源氏は、「人にさとは知らせで、我に得させよ。あとはかなくいみじと思ふ御形見に」（夕顔）と、玉鬘を引き取る意向を右近に示していたから、玉鬘巻頭時に初出ではないが、形式的には長編的構想の物語の冒頭形式なのである。この巻頭により、以後玉鬘が玉鬘十帖の求婚譚のヒロインとなり、光源氏の以後の主人公性が相対化していくことが予示されていることになる。[2] そして、末摘花巻頭で語られていた夕顔への思いが末摘花に向かっていったように、玉鬘巻頭で示されていた夕顔の喪失をいまだ「あはれに口惜しくのみおぼし出」でていた光源氏の思いは、夕顔の「御形見」である玉鬘に向けられていくことになる。とりあえず、玉鬘は光源氏の養女、外向きには実娘として、六条院に迎え入れた。

倉田実氏は、行幸巻での玉鬘の裳着によって光源氏との養子縁組が正式になされたのであり、玉鬘は光源氏の実子を偽装されて六条院入りしたのであって、「養女として六条院入りした」のではない、といわれる。[3] 確かにそのとおりなのだが、光源氏や紫上、右近、玉鬘とその従者たちなど、事情を知っている者においてはやはり養女扱いされて六条院入りしたわけで、裳着までの間はそうした二重性をもっているのである。

光源氏と十四歳差の玉鬘が二十一歳で、光源氏の妻・愛人としてで

なく、養女として六条院入りしたのには、いくつか事情がある。まず夕顔巻での夕顔頓死後から光源氏がその意向を示していた。頓死事件後の大病から回復して、右近から夕顔の素性を聞いた際に、雨夜の品定時に頭中将の語っていた幼児の存在を確認して、「いづこにぞ。人にさとは知らせで、我に得させよ。あとはかなくいみじと思ふ御形見に」、「そのあらむ乳母などにも、ことざまに言ひなして、ものせよかし」（夕顔一三九）、と。だが、前掲の玉鬘巻頭部に引き続いて、「（右近は）ひとへにものを思ひつつみ、また、（光源氏が）いまさらにかひなきことに寄りて、わが名漏らすな、と口がためたまひしをはばかりきこえて、尋ねても訪れきこえざりしほどに」とあるように、夕顔頓死の事実とその責任相手が光源氏であることを隠したまま、三歳の玉鬘を右近が連れ出すことは実質不可能で、相互に情報が途絶えたまま十八年が過ぎた。その間も、玉鬘巻で玉鬘一行と邂逅した右近が一行に語ったところによると、右近が光源氏に、機あるごとに夕顔の遺児玉鬘の話題を取り上げると、「聞こしめしおきて、われいかで尋ねきこえむと思ふを、聞きいでたてまつりたらば」（玉鬘七三九）知らせよ、「かの御代はりに見たてまつらむ、子も少なきがさうざうしきに、わが子を尋ねいでたると人には知らせて、とそのかみよりのたまふなり」と言って、引き取り・実子偽装の意思を当時から（夕顔頓死直後だろう）継続して示していたのであった。であるから、玉鬘巻で右近が実際に玉鬘を見つけ出し、光源氏にそれを報告するまで、玉鬘自身は二十一歳になっていながら、玉鬘と光源氏の関係は、光源氏の意識の中では夕顔巻当時のまま、玉鬘を迎えて養女として養育する、という認識がまずは持続していたのである。

つぎに、右近が、「須磨の御うつろひのほどに、対の上の御かたに、みな人々聞こえわたし給ひしほどより、そなたにさぶらふ」と、光源氏の須磨退居時以来、紫上付きの侍女になっていたことの影響がある。玉鬘巻で光源氏に玉鬘発見の報告をすべく長谷から帰京し、六条院に参上した時にも、翌日「とりわきて右近を召しいづれば、面だたしくおぼゆ。大臣も御覧じて、『などか、里居は久しくしつるぞ。…』」（玉鬘七四一）と、右近を召し出した主人が紫上であり、大臣光源氏はそこに陪席していたのだとわかる。光源氏は紫上と常に一緒にいたから、右近は主人である紫上に、かつての主人であり光源氏の情事の相手であった夕顔の遺児の話を聞かせにくく、光源氏も右近の主人である紫上への手前、かつての情事の相手である夕顔の遺児を二十一歳になっているからといって愛人として六条院に迎えるとは言えなかった。玉鬘発見の報告を紫上の前で右近から聞いた光源氏は、「われに似たらばしも、うしろやすしかし、と、親めきての給」ほかなかったのである。玉鬘はこうしてまず養女として迎えられるしかなかった。玉鬘巻頭に見られる長編的構想の物語の冒頭形式のとおりである。

そして、夕顔追慕の念で同様に語られ始めていた末摘花巻頭との対比で言えば、末摘花巻における末摘花体験の失敗により、「かたちなどは、かの昔の夕顔と劣らじや」と容貌を気にし、「かの末摘花の言ふかひなかりしをおぼしいづれば、さやうに沈みて生ひいでたらむ人のありさま、うしろめたくて、まづ文のけしきゆかしくおぼさるるなりけり」（玉鬘七四五）と、筆跡・和歌・教養のさまが気になり、結

果はともに及第であったばかりか、母夕顔と比べても、長谷寺で観察した右近の目にも、玉鬘は、「母君は、ただいと若やかにおほどかにて、やはやはとぞたをやぎ給へりし、これはけだかく、もてなしなど恥づかしげに、よしめき給へり」（玉鬘七四〇）と、貴族めいた品格を有していた。玉鬘は、筑紫に下向する四歳時、また十歳ばかりの時にも、その美しさ、気高さが語られていたが、その後も、「この君ねびととのひ給ままに、母君よりもまさりてきよらに、父大臣の筋さへ加はればにや、品高くうつくしげなり。心ばせおほどかにあらまほしうものし給」と、母夕顔以上に、容貌心ばせなどが申し分なく貴族的であることが語られ、「二十ばかりになり給ままに、生ひととのほりて、いとあたらしくめでたし」と、結婚可能の望ましい理想的女性となったのである。そのころ筑紫で「ものおぼし知るままに、世をいと憂きものにおぼして、年三（ねさう―尾州家河内本・陽明本など、「ねんさう」―池田本・麦生本・阿里莫本、「ねむさう」―肖柏本・穂久邇文庫本）などし給」とあるのも、周囲の推奨もあっただろうが、藤袴巻末に「女の御心ばへは、この君をなむもとにすべき、と大臣たち定めきこえ給ひけりとや」と評されることに繋がる玉鬘の処世意識の高さを示すものである。

二　「年三」と「ねさう」

玉鬘が、「ものおぼし知るままに、世をいと憂きものにおぼして」修したという「年三」[4]は、その所依の経典により多少目指すところの趣を異にする。『拾芥抄』（『尊経閣善本影印集成』17）によれば、正月・五月・九月の上十五日に持戒斎行道などし、また五味を断ち持戒精進し、佛菩薩名を称して、「一切罪業消滅、災難無起、命終之後往生十方浄土云々」と、現世を安穏に過ごして、後世の往生十方浄土を願うものだが、『提謂波利経』では、五戒を保つことを基本に、六斎日・八王日とともに、年三長斎を修して、「生天」・「増寿益算」・「定福禄」と、より世俗的な功徳になっている。『仏説年三長斎殊勝福田功徳経』では、「忽脱諸難。必獲殊勝福利」と、それは一段と現世的に傾く。中国の民衆宗教の色合いが濃い。「よをいとうきものにおほして年三なとし給」のなら、後世の往生十方浄土に目を向けた『拾芥抄』の場合が最も自然と思うが、より現世的であってもおかしくはない。

「ねさう・ねんさう（年星）」等は、大島本「年三」部分の傍書に「當年星」、『源氏和秘抄』（続群書類従一八下）に、「ねさう　ねんさうといひて。年に三たびせうじをする也。又當年しやうをまつることをもいふといへり。」ともあるように、これ以後の注に、「ねんさうなとし給　…又年星とて其年の星を祭る事也…」（『尋流抄』井爪康之編）、「ねさう　年星也　又年三…」（『内閣文庫本細流抄』源氏物語古注集成七）、「ねさう　…一説年星歟云々当年の星の事也」（『休聞抄』源氏物語古注集成二二）、「ねんさうなとし給…　…又云毎年星をまつることをいふともいへり…」（『万水一露』源氏物語古注集成二五。この「毎年星」には誤りがあるか）と、見られるようになるものである。源氏物語以外では、『後撰和歌集』に、

年星をこなふとて女檀越のもとよりすゝをかりて侍けれはく
はへてつかはしける

ゆいせい法師　惟済

もゝとせにやそとせそへていのりくる玉のしるしを君見さらめや

（『後撰和歌集』巻二十慶賀　天福二年本、『冷泉家時雨亭叢書』）

とみえ、詞書「年星」の部分、非定家本では、堀河本を除いて「年三」、定家本では、初期の中院本を除いて、天福二年本を含め「年星」とある。また、『帥大納言集』（内題、経信卿家集。書陵部蔵）に、

あこかひめきみの、ねさうしゝはしめられしに、あふきにかきつけられし

あさゆふにあふきてをかむかひありて　そらなるほしもあはれとはみよ

とある「ねさう」も「年星」と考えられる。（異本の『大納言経信集』書陵部蔵には、「ねさう」の部分が「年三」とある。）

この「年星」は、『織田佛教大辞典』「ネンシヤウ（年星）」の項に、「古語にねんさうと讀む、人人其の年の當り星なり、若し其の星他に侵さるることあらば其の人災害を蒙ると云う、密教に之を禳ふ法あり、俗に之を星祭と云ふ。」、「ホシマツリ（星祭）」の項に、「宿曜経に人人の當年星本命星の侵さるるを以て其人に災ありと説く。然るに如来の大悲陀羅尼を説て之を消除す。」とあり、また、『密教大辞典増訂版』「ゾクシヨウク（屬星供）」に、「當年所屬星供の義にて當年星供ともいひ、又は單に星供（ほしく）と稱す、星供には本命星供と屬星供とあれども、現時は多く屬星供を行ふ。當年星に供養して轉禍成福を祈る法なり」とあるものと考えられる。當年星は、『掌中歴』（続群書類従三二上）・『二中歴』（『新訂増補史籍集覧』）・『拾芥抄』下の各「屬星歴」に同様に見えるもので、五曜と日月、羅睺星、計都の九星を、羅睺星、土曜、水曜、金曜、日曜、火曜、計都、月曜、木曜の次第で、一歳から順に、そして一巡すれば再び羅睺星を十歳から循環的に年齢によって配属していくものである。そして、この當年星は、「その年、その年齢の運命が所属する星で、一年間に限った属星だから、一般に年星（ねぞう）と呼ぶ」（速水侑氏『呪術宗教の世界』）と言われるもので、速水氏も言及されるように、「當年星ニハ當年屬星ト云ヘシ」（『澤鈔』大正新修大蔵経）、「當年所屬曜」・「當年行年所屬神」（『小野六帖』大正新修大蔵経）などと称される。前掲の、『織田佛教大辞典』に、「若し其の星他に侵さるることあらば」というのは、天徳元（九五七）年に日延が請来した『新修符天暦経幷立成』等によって従来に比較して格段に正確な天体の運行を計算することができるようになり、そうした暦算によって生まれた年月日時刻による九曜の位置などに基づき一生の運命を占う「生年勘文」、ある特定の年の個人の運命をその年の九曜の位置により占う「行年勘文」、日食・月食による影響を占う「日食勘文」、「月食勘文」などの「宿曜勘文」が作られるようになったことと関係する。[5] 當年星に変異等があれば（なくても必要に応じ）、「星祭」「當年星供」を行うのである。しかも、『新修符天暦経幷立成』等を請来して宿曜道の成立をもたらした日延は、後、遁世隠居し、老親とともに、大宰府近郊（「近畿府家之鎮山」）に下向し、康保年中（九六四～九六八）、九条師輔の菩提を弔う為に大浦寺を建て（『平安遺文』

四六二三「太宰府政所牒案」太宰府神社文書）、この大浦寺は平安中期には代々座主を置いて、室町期に至っている（『福岡県の地名』日本歴史地名大系41「大浦寺」の項）ように、北九州との関係も深い。星祭・當年星供の目的は、「災難消除」「轉禍成福」である。

玉鬘が、「年三」「年星」いずれを修したのか、諸状況から断定は下しにくいが、結婚適齢期の女性の開運を求めての状況の意志、十世紀後半からの宿曜道の広まり、日延と北九州との関係の深さからすると、「年星」の方がふさわしく思われる。玉鬘は処世意識・意欲の強い女性だったのである。

三　六条院丑寅の町の西の対

その玉鬘は、六条院の丑寅の町、西の対に、既に置かれていた文殿を他に移して、入った。南の町は人多く余裕がなく、西の町は秋好中宮の侍女待遇に見なされるのを恐れての処置だったが、これについては、村井利彦氏の発言が注意される。[6] 氏は、母夕顔が亡くなった「西の対」のある某院が、(1)源融の六条河原院を意識して書かれている以上、六条にあり光源氏が自由勝手にしてよい施設で、末摘花巻に「かの、ものに襲はれしをりおぼしいでられて、荒れたるさまは劣らざめるを、ほどのせばう、人げの少しあるなどに慰めたれど」とあるところから、常陸宮邸より広大で、「六条院造営に際しては、六条にあった某院も六条御息所邸のごとく取り込み利用したと考えられる。」（八七頁）(2)少女巻に「もとありける池山をも、便なき所なるをば崩しかへて、水のおもむき、山のおきてをあらためて、さまざまに、御かたがたの御願ひの心ばへを造らせ給へり」とあることが、六条御息所邸のみならず、「六条院の規模に相当する『池山』を有する古い施設」「某院」の再活用を示している。(3)「昔光源氏と夕顔が愛の逃避行をした」某院が、光源氏との愛に田子のようにもがいていた六条御息所邸の東隣北隣とは考えにくいから東北に位置するだろう。その結果六条院丑寅の町の西の対に入った「玉鬘は、夕顔の死んだ位置にいて、夕顔の命を源氏物語に繋いでいる。」（八八頁）と言われる。だとしても、某院が一町規模であったかどうか（河原院は『二中歴』に「六条北京極東」、即京外鴨河原域、町数不明、『拾芥抄』に「六条坊門南万里少（ママ）路東八丁云々…本四丁京極西」とある。）、一町としても六条院造営に際し、丑寅の町には馬場や馬場の大殿が設けられ、その西の対に某院の西の対の位置が継続されたか否か、問題はあるが、イメージ想起の地平においては十分あり得る推論だろう。

光源氏が、玉鬘を夏の町の西の対に住まわせ、「われはかうさうざうしきに、おぼえぬ所より尋ねいだしたるとも言はむかし。好き者どもの心尽くさするくさはひにて、いといたうもてなさむ」（玉鬘七四四）などと語ったのに対し、右近は、「いたづらに過ぎものし給ひしかはりには、ともかくもひき助けさせ給はむことこそは、罪軽ませ給はめ」と言っていたように、玉鬘を「好き者どもの心尽くさするくさはひ」として、「いといたうもてな」すことが、光源氏の滅罪、夕顔供養であり、日向一雅氏の言われるように、「夕顔鎮魂のための何よりの術法」であった。[7] 冷泉帝後宮には、既に内大臣娘の弘徽殿女御、

光源氏養女の秋好中宮が存在し、当時九歳の東宮には、七歳の明石姫が将来の妃として控えていた。明石姫は后となることが予言されていたし、光源氏・右近の意識では、藤壺宮と紫上ともども美人の極点であった。玉鬘が仮に内大臣方の娘として入内しても、東宮の十二歳上、美女度でも明石姫にわずかにしろ及ばない。であるならば、太政大臣の娘として貴族社会の注目を浴び、華やかな求婚競技のヒロインとして幸せな結婚をさせてあげることが、母夕顔と娘玉鬘の為に最も望ましいことであった。ちなみに、このことは、光源氏が前斎宮秋好を養女に迎えて、冷泉帝後宮に入内させ、中宮に即けて、それが母六条御息所の慰霊、光源氏の滅罪行為と意識されたことと類比的である。

玉鬘が、母夕顔の頓死した某院西の対を想起させる、六条院丑寅の町の西の対に入ったことは、夕顔玉鬘母娘の連続性・一体性を意識させ、玉鬘を夏の町の西の対に、文殿を移動させてまで据えた光源氏の内面までも窺わせるものである。

四　母夕顔と娘玉鬘

だが、光源氏は、この求婚競技の企画者・指南役でありながら、玉鬘に恋心を抱くようになる。

前もって言っておけば、光源氏が玉鬘を養女でなく、自分の妻の一人、あるいは愛人とすることが、世間的にも可能であったことは、以下に言及する、いくつかの記述から確認できる。胡蝶巻では、美しく気が利いて、親しみやすい性格の玉鬘を、光源氏が「わが御心にも、すくよかに親がりはつまじき御心やそふらむ、父大臣にも知らせやしてまし、などおぼしよるをりをりもあ」（七八七）ったし、玉鬘を六条院に引き入れた右近が、光源氏を玉鬘の「親と聞こえむには、似げなう若くおはしますめり、さし並び給へらむはしも、あはひめでたしかし、と思」（胡蝶）っていた。また蛍巻では、玉鬘も光源氏の懸想を「親などに知られたてまつり、世の人めきたるさまにて、かやうなる御心ばへならましかば、などかはいと似げなくもあらまし」（八一〇）と思い、藤袴巻では、光源氏から玉鬘の存在を告げられた実父の内大臣が、「尋ね得給へらむはじめを思ふに、定めて心きよう見放ち給はじ、…、それを疵とすべきことかは、ことさらにも、かの御あたりに触ればはせむに、などかおぼえの劣らむ」（九〇一）と思っていた。さらに真木柱巻では、夫となった髭黒が玉鬘の処女であったことを「かの疑ひおきてみな人のおしはかりしことさへ、心きよくて過ぐいたまひけるなどを、ありがたうあはれと思ひましきこえ給」（真木柱九四〇）いもしていた。

であるのに、二人の間に性的交渉の不成立に終わったことの理由を、藤井貞和氏は、光源氏と六条御息所の遺児秋好中宮との場合も含めて、近親婚のタブーのためとして説明されている[8]。確かにこの二つのケースは、「六月（十二月）晦大祓」「国津罪」の一つ「母與子犯罪」（「まずある女と通じ、後にその女の子と通ずる罪」日本古典文学大系頭注）に当るもので、歴史的には、『とはずがたり』の後深草院と二条娘・母の例、逆の「子與母犯罪」としては、平城天皇と藤原薬子母・娘、などの例が指摘できるが、六条御息所が光源氏に前斎宮を「おも

ほし人めかさむ」ことをあえて拒んだことも含めて、源氏物語では、「母與子犯罪」が意識されていないように見える。この現象は物語の表層と深層の問題なのかもしれないが、「表層」において、さらに考えるべきであろう。[9]

光源氏が玉鬘に恋心を抱くようになる経緯には母夕顔への思いが重なる。秋山虔氏がいわれるように、「あの夕顔への惑溺が、そのままむすめに転移する好き心があった」[10]のである。光源氏は、右近との前掲の「好き者どもの心尽くさするくさはひ」「罪軽ませ給はめ」会話の後、次のように言う。

あはれに、はかなかりける契りとなむ、年ごろ思ひわたる。かくてつどへる方々のなかに、かのをりの心ざしばかり思ひとどむる人なかりしを、命長くて、わが心長さをも見はべるたぐひ多かめるなかに、言ふかひなくて、右近ばかりを形見に見るは、口惜しくなむ。思ひ忘るる時なきに、さてものしたまはば、いとこそ本意かなふここちすべけれ。（玉鬘七四四）

夕顔への愛情執着緊張度の極点は、（藤壺宮はさておき）紫上の場合も及ばぬもので、夕顔を忘れるときなく、あっけない宿縁と思い続けている、形見である玉鬘を迎え入れるのは、それの補償となる、と。この発言に右近への顧慮はそれほど働いていないだろう。そして、玉鬘の歌と書の出来を見て六条院入りに問題なしと確認し、紫上にもかつての恋人夕顔の存在を打ち明けて、次のように言う。

人の上にてもあまた見しに、いと思はぬ仲も、女と言ふものの心深きをあまた見聞きしかば、さらにすきずきしき心はつかはじ、となむ思ひしを、おのづからさるまじきをもあまた見しなかに、あはれとひたぶるにらうたきかたは、またたぐひなくなむ思ひいでらるる。世にあらましかば、北の町にものする人のなみには、などか見ざらまし。人のありさま、とりどりになむありける。かどかどしう、をかしき筋などはおくれたりしかども、あてはかにらうたくもありしかな。（玉鬘七四七）

夕顔は、品よく、誰よりも心を揺さぶられるほどひたすらに可憐であった、と。教養があり、機転を働かす点は、眼前の紫上の方が優れているが。また、花散里に玉鬘の養母を依頼する際には、

かの親なりし人は、心なむ、有り難きまでよかりし。御心も後安く思ひ聞ゆれば。（玉鬘七四八）

光源氏がここで言う「心」のよさとは、例えば前掲末摘花巻頭にみえる、他の女性達の「けしきばみ心深きかたの御いどましさに」対して、夕顔の「けぢかくうちとけたりし、あはれ」をいうのであろう。

このように、右近・紫上・花散里、三者三様に焦点を変えて夕顔への思いを表白していた光源氏は、六条院入りした玉鬘に初めて対面して、こう言った。

「年ごろ御行くへを知らで、心にかけぬひまなく嘆きはべるを、かうて見たてまつるにつけても、夢のここちして、過ぎにしかたのことどもとりそへ、忍びがたきに、えなむ聞こえられざりける」とて、御目おし拭ひたまふ。まことに悲しうおぼしいでらる。（玉鬘七五〇）

長年行方を尋ねていた玉鬘に会えて、母夕顔との事が思い出されて堪

えがたい思いだ、と。そして、返事をする玉鬘の「ほのかに聞こえ給声」が「昔人にいとよく覚えて、若びたりける」のを、光源氏は確認した。聞き覚えのある夕顔の声は十九歳時のもの、いま玉鬘は二十一歳、声で夕顔が若く甦ったのである。これについての光源氏の感慨は特に示されていないが、玉鬘が容貌も教養も、末摘花とは異なり貴族女性として及第であったのを喜び、紫上の許へ帰った後、思いを述べた手習に、夕顔の遺児玉鬘が光源氏の許へ寄り付くことになった縁を思量し、

恋ひわたる身はそれなれど玉かづらいかなる筋をたづね来つらむ　（玉鬘七五一）

と書いて、「あはれ、と、やがてひとりごち」た時、光源氏の心には、玉鬘に夕顔がかさなっていたはずだ。感に浸っている光源氏の姿を見て、紫上も、「げに深くおぼしける人のなごりなめり、と見」て、光源氏にとって夕顔が特別の女であったことを理解した。

ところで、この時紫上に、先に右近にも言っていた、玉鬘を好き者の心尽くさせる「くさはひ」としてもてなすことを再び述べ、六条院に来ては「いとうるはしだちてのみ」いる好き者どもの「心乱り」て「なほうちあはぬ人の気色見集めむ」と言ったのは、光源氏本人は参加できない、玉鬘争奪競争のへの代償行為とも理解できる。それゆえ、それを聞いた紫上は、「あやしの人の親や。先づ人の心はげまさむ事を先におぼすよ。けしからず」と、玉鬘を女として見ている光源氏に気づいた。光源氏は即座に反応して、「まことに君をこそ、今の心ならましかば、さやうにもてなして見つべかりけれ」と言い返した光源氏の「今の心」には、男の情念が燻っていたのである。玉鬘と光源氏の親子関係は既に不安定な状態にある。

そして、玉鬘巻末で新年用に、「くもりなく赤きに、山吹の花の細長」を玉鬘によそえた時、紫上が、見ぬように見て合点し、「内の大臣の、はなやかに、あなきよげとは見えながら、なまめかしう見えたるかたのまじらぬに、似たるなめり、と」推量したように、母夕顔を越える玉鬘の器量は父親由来のものが勝っていたようだ。かつ、そう推量した紫上の様子は、「色には出し給はねど、殿見やり給へるに、たゞならず」と語られ、紫上が、明石御方ともども玉鬘に並々ならぬ注意を向けていたことが知られる。光源氏と血の繋がっていないことを知っている紫上は、玉鬘を警戒していたのである。光源氏は紫上との関係からも、玉鬘に軽率な行動は取り得ない。

年越えて初音巻、正月、山吹の細長にもてはやされて、はなやかに明るい玉鬘が、物思いに沈んで、髪が少しほっそりとさわやいでいるのを見て、このような玉鬘を六条院に迎え入れることがなかったのならばとおもうにつけても、「えしも見過ぐし給まじくや」と、光源氏の玉鬘への思いは、語り手に予想されるようになるが、ここの玉鬘には父親譲りの容貌、そして実父に会いたいという思いは知られるが、母夕顔の存在は直接にはうかがえない。

それから二か月余り後の三月末、胡蝶巻では、「けしきいと労あり、なつかしき心ばへと見えて」と、玉鬘に初めて「なつかし」という語が使われる。夕顔巻の「なつかし」「なつかしげなり」五例のうち三例は夕顔に関して用いられ、二例は光源氏に関して用いられる。夕顔

に係わりの深いことばなのである。この「なつかしき心ばへ」により、六条院の他の女君たちと良好な関係を築いている玉鬘が語られ、求婚者も増える中で、光源氏も、「わが御心にも、すくよかに親がり果つまじき御心や添ふらむ、父大臣にも知らせやしてまし、など、思し寄る折々もあり」と、玉鬘への思いが膨らみ、実父を偽装し続けることに自信が持てなくなってくる。実父に存在を知られたいと内心では思いながら、それを口にはせず、一途に光源氏を信頼し打ち解けてくる玉鬘の可憐で若々しい様は、「似るとはなけれど、なほ母君のけはひに、いとよくおぼえて、これはかどめいたるところぞ添ひたる」と語られ、今までの声のみならず、「けはひ」も母夕顔を彷彿させるようになる。光源氏にうちとけてくる「なつかしき心ばへ」が効いているのである。

光源氏の玉鬘への思いが明確に示されるのは、四月に入って、玉鬘への多くなってくる求婚者たちの懸想文に対する対応を指南をしつつ、都慣れして垢ぬけて来た玉鬘を、「こと人と見なさむは、いと口惜しかべう思さる」と語られるところだ。右近も目の前の二人を見て、「親と聞こえむには、似げなう若くおはしますめり、さし並び給へらむはしも、あはひめでたしかし、と思」っていた。

この場面で注意されることは、光源氏が、主要な求婚者である兵部卿宮と髭黒大将の注意点を語った後、玉鬘に相談相手として、「まろを、昔ざまになずらへて、母君と思ひない給へ。御心に飽かざらむことは心苦しく」と、語ったことだろう。光源氏は、十八歳時北山で幼い紫上を見出し、祖母尼に養育を申し出た時にも、

あはれにうけたまはる御ありさまを、かの過ぎ給ひにけむ御代はりにおぼしないてむや。言ふかひなきほどの齢にて、むつましかるべき人にもたちおくれはべりにければ、あやしう浮きたるやうにて、年月をこそかさねはべれ。同じさまにものし給ふなるを、たぐひになさせ給へ、といと聞こえまほしきを、かかるをりはべりがたくてなむ、

（若紫）

と、幼くして母を亡くした共通点を梃子に、自分を母代わりに見なして預けてほしいと申し出ていた。この言葉には真情もこめられていたであろう。実際に、祖母尼の死後、紫上を二条院に迎え入れ、母のごとくに育て上げたことは、須磨に退居した光源氏からの文を読んで紫上が光源氏を深く恋い慕ったときに、紫上が光源氏に、「馴れむつびきこえ、父母にもなりて生ほしたてならはしたまへれば、恋しう思ひきこえたまへる、ことわりなり」（須磨）と語られていることからも知られる。同様の言葉は、母六条御息所を亡くした前斎宮にも見舞いの折に述べていた。

かたじけなくとも、昔の御なごりにおぼしなずらへて、けどほからずもてなさせ給はばなむ、本意なるここちすべき。

（澪標五〇九）

この二人、紫上は、二条院迎え入れ当初は内々の養女扱いであるし、前斎宮も養女となった。尤も、前斎宮の養母には紫上がなったが。母を亡くした女性に、「けどほからずもてなさせ」て、男が近づくには、亡き母代わりのポジションを使うのが効果的だったのであろう。母と娘は繋がりが深いのが普通だからである。男子だが、父親から疎遠に

されているとこぼした夕霧に、祖母大宮も、「母にもおくるる人は、ほどほどにつけて、さのみこそあはれなれど」（少女七〇二）と言っている。光源氏は、玉鬘にも三度、男ながら母代わりにと言って、親しく近づこうとしたのである。実際、蛍巻で兵部卿宮の来訪時に玉鬘に蛍を放ったりして、周到な世話をした光源氏を、侍女たちは、「よべいと女親だちて、つくろひたまひし御けはひを、うちうちは知らで、あはれにかたじけなしとみな言」（蛍八一〇）っていた。だが、この時点で玉鬘には既に養母として花散里が存在していたから、光源氏は文字どおり、「まろを、昔ざまになずらへて、母君と思ひない給へ」と、自分を玉鬘の記憶にも残っていない、母夕顔と思うように求めたのである。そのうえで、玉鬘への思いはまだ口に出来ぬが、「けしきあることばは時々まぜ給」う挙に出たのである。

ところが、それに気づかぬふうで、実父の内大臣に会いたい思いを光源氏の前では否定する玉鬘を、光源氏は、ますますかわいいと思い、紫上に母夕顔と比較しつつ、こう言った。

あやしうなつかしき人のありさまにもあるかな。かのいにしへのは、あまりはるけどころなくぞありし。この君は、もののありさまも見知りぬべく、けぢかき心ざまそひて、うしろめたからずこそ見ゆれ　（胡蝶七九四）

声と「けはひ」が似ていると言われていた母と娘の性格の違いが口をついた。かつて「はかなびたるこそは、らうたけれ」（夕顔）と述べられていた夕顔の魅力が、ここでは「あまりはるけどころなくぞありし」と、否定的に評価され、玉鬘の明るく親しみやすい聡明さが称揚されている。昔の母より今の娘に、光源氏の心の動いていることが知られる。それを察した紫上に、

「ものの心得つべくはものし給ふめるを、うらなくしもうちとけ頼みきこえ給ふらむこそ心苦しけれ」…、「いでや。われにても、また忍びがたう、もの思はしきをりをりありし御心ざまの、思ひいでらるるふしぶしなくやは」　（胡蝶七九四）

と、紫上自身の、二条院に引き取られて以来の体験に重ねられた皮肉を言われた光源氏は、

心のうちに、人のかうおしはかり給ふにも、いかがはあべからむ、とおぼし乱れ、かつはひがひがしうけしからぬわが心のほども、思ひ知られ給うけり。　（胡蝶七九五）

と、玉鬘の扱いを思案し、物語の記述としては、養女に思いを抱く自分の料簡を初めて否定的に自覚する。その起点がこのように、紫上の、玉鬘と重ねられ類比的な自己の体験による皮肉であったことが注意される。玉鬘は、紫上・秋好中宮と養女的な立場において共通性を持ちながら、六条院入りに際し、愛人としてではなく、養女として扱われることになった時以来、光源氏の玉鬘の処遇に関する判断を通して、紫上の影響を受け続けているのである。

だが、そうした自身の玉鬘に対する料簡の不埒さを自覚しながら、光源氏は玉鬘への思いを抑えられず、言動に出すに至る。四月、雨後の新緑の清澄さに玉鬘を想起して訪れる。

手習ひなどして、うちとけ給へりけるを、起きあがり給ひて、恥ぢらひ給へる顔の色あひいとをかし。なごやかなるけはひの、ふ

と昔おぼしいでらるるにも、忍びがたくて、「見そめたてまつりしは、いとかうしもおぼえ給はずと思ひしを、あやしう、ただそれかと思ひまがへらるるをりをりこそあれ。あはれなるわざなりけり。…」とて、涙ぐみ給へり。…。箱の蓋なる御くだもののなかに、橘のあるをまさぐりて、

「橘のかをりし袖によそふれば変はれる身ともおもほえぬかな

世とともの心にかけて忘れがたきに、慰むことなくて過ぎつる年ごろを、かくて見たてまつるは、夢にやとのみ思ひなすを、なほえこそ忍ぶまじけれ。おぼしうとむなよ」とて、御手をとらへ給へれば、女かやうにもならひ給はざりつるを、いとうたておぼゆれど、おほどかなるさまにてものし給ふ。

袖の香をよそふるからに橘のみさへはかなくなりもこそすれ

むつかしと思ひてうつぶし給へるさま、いみじうなつかしう、手つきのつぶつぶと肥え給へる、身なり肌つきのこまやかにうつくしげなるに、なかなかなるもの思ひそふここちし給て、今日は少し思ふこと聞こえ知らせ給ひける。（胡蝶七九五）

ここで、光源氏が玉鬘に夕顔を想起したのも、やはり「なごやかなるけはひ」によってであった。当初はそれほど似ていないと思ったのは、おそらく容貌であり、「あやしう、ただそれかと思ひまがへらるるをりをりこそあれ」というのは、やはり見慣れてきた結果の「けはひ」であろう。「おほどかなるさま」「いみじうなつかしう」も、夕顔に繋がる「けはひ」であって、それらが、目の前の玉鬘の容貌・肉体と不可避に一体化しているのである。この「けはひ」によって、玉鬘は夕顔と一体化し、「世とともの心にかけて忘れがたきに…」の傍線部のごとく、光源氏にとっては夕顔そのものとなり、光源氏による肉体的な接触を発生させる。これが、光源氏のたくらみだとしても、口実の成り立ちとしては、こうなのである。

この後、さらに光源氏は、玉鬘に添い寝し、「これよりあながちなる心は、よも見せたてまつらじ。おぼろけに忍ぶるにあまる程を、なぐさむるぞや」と言い、「まして、かやうなるけはひは、ただ昔のこころして、いみじうあはれ」に思い、「ただ昔恋しき慰めに、はかなきことをも聞こえむ。同じ心にいらへなどし給へ」と、言い置いて帰っていった（胡蝶七九八）。夕顔への忘れられぬ思いは玉鬘で慰められ、玉鬘への思いは夕顔を口実にして募っていくのである。だとすれば、光源氏の思いは、次第により玉鬘にかたむいていくのであろうか。以後、光源氏による夕顔への言及は、常夏巻、玉鬘に対する和琴の論と演奏から内大臣に話が及び、雨夜の品定時に内大臣によって夕顔母子の物語が披露されたことを告げて、玉鬘を引き取っていることを内大臣に知らせたら、亡き母夕顔との事も知られてしまうだろうと、二人で唱和する個所と、藤袴巻での大宮に対する玉鬘引き受けの理由づけに出てくるのみである。ちなみに、玉鬘にとっての母夕顔は、これ以前、「まろを、昔ざまになずらへて、母君と思ひない給へ」と言っていた養父光源氏が、玉鬘に母を見て、明確に男として現れた後、自身の置かれた苦境の中で、「母君のおはせずなりにける口惜しさも、またとりかへしをしく悲しくおぼゆ」（蛍八〇五）と思ったのが個別での最後の言及である。

光源氏と玉鬘の物語において、夕顔はこうして一通りの役割を終えた。光源氏の夕顔への思いは生身の玉鬘の中に生き続けていくのである。

五　光源氏の「すき」

ここに至った、玉鬘に対する光源氏の恋心は、どのような質なのか、玉鬘に自分の思いを打ち明けて添い寝までしたのち、兵部卿宮来訪時に蛍を放つなど過剰な演出をする光源氏の言動に思い悩む玉鬘に関して、次のように語られていた。

さるは、まことにゆかしげなきさまにはもてなしはてじ、と大臣はおぼしけり。なほさる御心癖なれば、中宮なども、いとうるはしくや思ひきこえ給へる、ことにふれつつ、ただならず聞こえ動かしなどし給へど、やむごとなきかたのおよびなくわづらはしさに、おりたちあらはし聞こえ寄り給はぬを、この君は、人の御さまも、けぢかくいまめきたるに、おのづから思ひ忍びがたきに、をりをり人見たてまつりつけば、疑ひ負ひぬべき御もてなしなどはうちまじるわざなれど、ありがたくおぼしかへしつつ、さすがなる御仲なりけり。（蛍八一〇）

光源氏は、玉鬘に思いを打ち明けて以後、却って思いが募り、苦しいものの、玉鬘とは養父と養女の関係から、男女の仲にはなるまいと思い、一方、昔からの心癖で、秋好中宮にも乱れた言動を繰り返しているが、中宮という身分の重々しさにあえての接近はしないでいるのに対して、玉鬘は、近づきやすくはなやかなので思いを抑えがたく、疑わしい行動もしでかしやすいのだが、珍しいほどに反省して、微妙な関係になっていた、という。同じ養女として、秋好中宮と相対なのである。

また、常夏巻、玉鬘と和琴論から内大臣・夕顔に及ぶ話を交した後、「ただこの御ことのみ、明け暮れ御心にはかか」る状態になるが、心のままにふるまったとしても世間のそしりを受けて、自分はともかく、玉鬘が気の毒だ、「限りなき心ざしと言ふとも、春の上の御おぼえに並ぶばかりは、わが心ながらえあるまじくおぼし知りたり」。どんなに思い詰めていても紫上への思いには敵わないと自覚する。ならわき目もふらず玉鬘を愛する男と結婚させるがまし、兵部卿宮か髭黒と結婚させれば、あきらめもつくだろうか、とも思うが、玉鬘に琴を教えるのを口実に一層近づくと、玉鬘も光源氏を信じて打ち解けてくるので、このままでいられなくなり、六条院で婿を迎えて、合間に情を通じようかと、思いついたりして、厄介な状態に至る。その究極の計画が、玉鬘の尚侍としての入内であったが、息子夕霧に内大臣の推測として、光源氏のその意図が見抜かれ、光源氏は逆に、内大臣に「いかでかく心清き様を、知らせたてまつらむ」と思う。こうした光源氏の考えは、結局玉鬘の入内直前、髭黒による玉鬘略奪により頓挫し、玉鬘本人も参内後、髭黒邸に退出させられて、六条院を出ていくことになる。

光源氏の玉鬘に対する恋はこれで終わらざるをえなかったのだが、この恋が光源氏にとって何であったのかは、真木柱巻における光源氏

の次の思いに明らかである。

殿も、いとほしう人々も思ひ疑ひける筋を、心きよくあらはしたまひて、わが心ながら、うちつけにねぢけたることは好まずかし、と昔よりのこともおぼしいでて、紫の上にも、「おぼし疑ひたりしよ」など聞こえたまふ。いまさらに人の心癖もこそとおぼしながら、ものの苦しうおぼされし時、さてもや、とおぼしよりたまひしことなれば、なほおぼしも絶えず。（真木柱九三七）

玉鬘とは男女の関係に陥らず、当座の曲がったことは昔から好まない、紫上にも疑いを晴らせた、踏みとどまりはしたが、光源氏のあやにくな女癖で危険な状況にも至ったので、いまだ玉鬘を思い続けている、等々で、これらは、帚木巻頭の光源氏の本性記述と呼応しつつ、光源氏の玉鬘への思いに対する影響を当初から及ぼしていた紫上のこの恋における位置を再確認している。

ただ、光源氏の恋全体における、玉鬘への恋が持つ意味、占める位置については、さらに考察が必要であろう。そして、その手掛かりとなるのは、この恋に関する光源氏の反省の言である。[11] 参内後、二月、髭黒邸に引き取られた玉鬘を偲んで、

宿世など言ふもの愚かならぬことなれど、わがあまりなる心にて、かく人やりならぬものは思ふぞかし、と起き臥し面影にぞ見え給ふ。（真木柱九六三）

と、自分の度を越した思いが原因だという、自己責任感。同じく二月、玉鬘の光源氏を偲ぶ返書を得て、涙がこぼれるにつけても、養父養女の関係により、通常の男女の仲でなく「世づかず」もあり、

好いたる人は、心からやすかるまじきわざなりけり、今はなににつけてか心をも乱らまし、似げなき恋のつまなりや、とさましわび給ひて、（真木柱九六五）

と、「すき」の反省。そして三月、六条院の山吹の花に玉鬘を偲んで、

「思はずに井手のなか道隔つとも言はでぞ恋ふる山吹の花顔に見えつつ（忘られなくに）」などの給ふも、聞く人なし。かくさすがにもて離れたることは、このたびぞおぼしける。げにあやしき御心のすさびなりや。（真木柱九六六）

と、女との距離と認識し、この恋が戯れ心、と評されていることである。

四十歳になって、玉鬘と入れ替わりに女三宮を六条院に迎え入れる光源氏の「すき」の状態がこれからうかがえ、晩年にとどまらぬ光源氏の抱え込む問題が、彼の全人生的、人間的視野で見通されてくるであろう。

〔注〕

(1)源氏物語の引用は、『源氏物語大成』校異篇により、適宜、表記を改めた。漢数字は頁数。

(2)拙稿「『そのころ』で書き起こされる源氏物語の巻頭について」『国語国文』、一九八五年一月、参照。

(3)倉田実氏『王朝摂関期の養女たち』四六三頁

(4)以下、「年三」と「ね（ん）さう（年星）」については、拙稿「『年三』と『ねさう』の問題―玉葛論のために」『源氏物語の展望』九、二〇一一年四月に詳説した。

(5)桃裕行氏「宿曜道と宿曜勘文」『立正史学』三九、一九七五年三月

(6)村井利彦氏『源氏物語逍遙』、二〇一四年十二月
(7)日向一雅氏『源氏物語の準拠と話型』三二七頁
(8)藤井貞和氏『タブーと結婚』など。
(9)別稿を用意したい。
(10)秋山虔氏『源氏物語』
(11)斎藤暁子氏「玉鬘の結婚をめぐって」『源氏物語の探究』八、一九八三年六月、に、これらの個所に関する氏のその段階における考察がある。

（うえの　たつよし　日本文学科）

二〇一八年十一月十五日受理